こまったときの親鸞聖人

安田 登（やすだ のぼる）
能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
寺子屋 講師　（阿弥陀寺）
こどもお化け合宿 講師　〃
主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』『能　650年続いた仕掛けとは』他多数。

イラスト　中川 学

「宮商和して自然（じねん）なりの巻」

こんにちは。いつも寺子屋にお邪魔しております能楽師の安田登です。

世の中、困ったことだらけ。そんな困ったことを、僧侶でもなく仏教学者でもない素人の私が「どうしたらいいの」と親鸞聖人に問いかけていく。

そんな連載を今号より始めます。どうぞよろしくお願いいたします。

似ている者は憎い

出雲（島根）の空港は「出雲縁結び空港」という。出雲大社が縁結びの神様だからだ。そして、空港には縁結びの絵馬を掛けるところがある。

先日、その前を通りかかった時に絵馬のひとつが目に入った。そこには「息子に相手が見つかるように」と書いてあった。「え？」と思って（申し訳ないとは思いながら）ほかのも見てみると母親が息子のために奉納した絵馬がいくつもあった。聞けば本家の出雲大社にも、そのような絵馬が多いという。

息子の代わりに母親が出かける婚活パーティも多いらしいし、就活も母親がすることがあるという。この度を過ぎた（と私は思うのだが）仲のよさは母と息子だけではない。母・娘も「一卵性母娘」と呼ばれるような仲のよい母娘もいる。

が、これほどまでに仲のよい親子だが、それが何かのきっかけで崩れると、憎悪に変わることもある。

中でも「母娘問題」は社会問題にもなっている。異性ならばともかく、なぜ同性なのにわかりあえないのかと思ってしまう。が、実は同性だからこそ、似ているからこそわかりあえないのだ。

浄土は和している

これを音楽にたとえてみよう。

ド・レ・ミという三つの音がある。ピアノやオルガンなどの鍵盤では、この三つは並んでいる。このうち「ド」と「レ」のような隣り合う音を一緒に鳴らすと濁った音になる。これを不協和音という。

今度は間の音（レ）を抜いて「ド」と「ミ」の音を鳴らす。すると美しい響きになる。和音である。

近すぎる音、すなわち親（ド）と子（レ）では不協和音になり、間にひと世代おいた関係、すなわちお爺ちゃん、おばあちゃん（ド）と孫（ミ）とはよい響きになるのだ。

このドを昔の音階では「宮（きゅう）」と呼び、レを「商（しょう）」と呼んだ（本当はFとGだが気にせずに）。

親鸞聖人は「宮商和して自然なり」とおっしゃった。「宮（ド）」と「商（レ）」を一緒に鳴らすと濁った音、不協和音になるはずだ。しかし、親鸞聖人は「和して」いるという。不思議だ。

これは浄土のさまをうたったご和讃の一節で『無量寿経』というお経を私たちにわかりやすく教えてくださったものだ。お経には浄土のさまが次のように描かれる。

「宝石が輝く樹々を清らかな風が鳴らすと五つ音が鳴る。妙なるそれらの音で、本来は和するはずのない音たちまでもが自然に和す（清風時に発りて、五つの音声を出す。微妙にして宮商自然に相和す）」

これは音楽的にも理にかなった表現だ。西洋音楽は一オクターブの中に七つ（黒鍵を含めれば十二）の音があるが、日本音階などの古い音楽の音階は一オクターブの中に五つの音しかない。これをペンタトニック音階という。ペンタトニック音階の音楽には不協和音はないのだ。たとえばペンタトニック音階に調律された楽器があれば、全くの素人同士が適当に弾いても不協和音は生ぜず、美しい音楽ができる。

宮と商というふたつの音階だけではケンカしてしまう音同士も、五つの音声の中で演奏されれば和する、これがペンタトニック音階の特徴だ。

これを親子関係に当てはめると、同性同士の親子関係がこれほどまでに問題になっているのは、やはり核家族が原因とも考えられる。家庭の中に、宮（母）と商（娘）という近いもの同士しかいない状態では不協和音が生じる。しかし、昔のように祖父母や、あるいはもっと多くの人が同居していた五音の家ならば、不協となるべき関係も自然に和するのである。

和を以て貴しとなす

さて、細かいことにこ

だわって申し訳ないが、親鸞聖人のご和讃とお経とはよく読むとちょっと違うように感じる。

お経では「五つの音声によって宮と商が自然に和す」と書かれるのに、ご聖人は「宮と商はそのままで和しているし、そしてそれが自然な状態なのだ（宮商和して自然なり）」と詠われる。

祖父母の力で母子の関係がうまくいくというのがお経なのに対して、親鸞聖人は、いまの「うまくいっていない（不協和音）」状態のままで和している、そうおっしゃっているように私には感じる。しかし、不協和音なのに「和して」いるとはどういうことなのか。そもそも「和」とは何なのか。

阿弥陀寺にお参りされたことのある方ならば、見慣れない文字（龢）が書かれた、この額をご覧になられたことがあるだろう（写真）。横には「この字は和の本字で聖徳太子がご使用になられた」と書いてある。

「和」は「龢」が本当の字であり、さらに昔はこう書かれた。

左側の下にある「冊」は、竹を並べて紐でくくった形で、その上には歌口（口）が付いているので、これが何本もの笛であることがわかる。その上の「龢（合）」はそれを合わせることを表す。この字はたとえば笙やパンフルートのようにさまざまな音の高さを合わせた楽器である。

すなわち「和（龢）」とは、そんな楽器のように、さまざまな意見を持つ人や、いろいろな人々が一緒に集まることをいう。

ちなみに「和（龢）」の逆、すなわち同じ意見の人や、同じ種類の人たちだけが集まるのは「同」と言う。孔子は「和」を大事にするのが君子、「同」を大事にするのが小人であると言った。

不協和音のままで

聖徳太子が「和を以て貴しとなす（十七条の憲法）」と言われたことはよく知られている。その和を太子は「龢」と書かれた。同じ意見の人だけを集めるのではなく、違った考えの人、違った民族の人、さまざまな人が一緒になるのが貴い、そうおっしゃったのだ。

実は太子の「和を以て貴しとなす」には元ネタがある。『論語』の「礼の用は和を貴しとなす」だ。一見そっくりなこの両者だが、しかし言っていることはまったく違う。

聖徳太子は「和」を無条件に貴いといっているが、『論語』では和は「礼」の作用によってはじめて貴くなると言っている。

「礼」とはルールであり、規則である。意見の違う人が集まったとき、『論語』ではそれをまとめるには「礼」が必要だと言っているが、「いや、いや。意見の違う人が集まる、それだけですばらしいのだ」とおっしゃったのが太子なのだ。

ご和讃の「宮商和して自然なり」に戻れば、不協和音が不協和音のままにあることこそが「和」で、そしてそれこそが自然な状態なのだと親鸞聖人はおっしゃっているように思える。母と娘の考え方や行動が違うのは当たり前だ。それが自然な状態なのだ。

それを無理に一緒にしようとする「同」などせずに、違うものを違うものとして認め合う、それが「和」だ。

私たちは聖徳太子の昔から、違うものを違うものとして認め合う風土の中で生きてきた。老人は若者の無鉄砲さを愛し、若者は老人を無条件に尊敬した。ところが近年は、なんでもひとつにしたがる傾向が強くなってきた。違うものを、違うものとして認め合えば、そこには自然に調和が生まれる。むろん、認め「合う」のは難しい。どちらかが歩み寄っても、相手が歩み寄って来ないことも多い。そうすると「せっかく俺が譲歩したのに何だ」と思ってしまう。

だが、なかなかうまくいかないのも「和」だ。急いで「同（一緒）」を求めず、まずは気づいた人から一歩歩み寄る。五年、十年、ゆったり待つ気で歩み寄る。その歩み寄る一歩が「和」なのである。

図書紹介

『変調「日本の古典」講義』
身体で読む
伝統・教養・知性
内田樹
安田登
1600円＋税
祥伝社

安田さんと僕は二人ながら「昔の人の心身のうちに入り込む」ということの専門家です。そんなことを専門にしてどんな「いいこと」があるのだろうと疑問を抱く人がきっといると思いますが、その疑問はお読みになるうちに氷解すると思います。とりあえず二人とも最初から最後まで上機嫌ですから「そういうこと」ができると機嫌よく暮らせるということは確かです。

（内田樹「はじめに」より）